

あまんきみこ『白いぼうし』論

～教科書教材としての可能性～

3年1組 27番

西山 優菜

2021年11月15日提出

I はじめに (アブストラクト)

あまんきみこによる『白いぼうし』は、雑誌『びわの実学校』24号(1967年8月)に発表され、『車のいろは空のいろ』(ポプラ社・1968年3月、ポプラ社文庫・1977年5月、講談社文庫・1978年7月)に収録された作品である。さらに、1971年から現在に至るまでの50年間、小学校4年生の教科書教材として掲載され続けている。

教室における『白いぼうし』の読みは、作品の中心人物である松井さんの優しさに傾斜したものが、ほとんどである。このことは度々問題視されてきた。しかし、先にも述べた通り、『白いぼうし』は、半世紀もの間教科書に掲載され続けており、おそらく、これからも掲載され続けていくだろう。『白いぼうし』は教科書教材としてどのような可能性を持つのか。

まず、この作品のあらすじと、国語の授業ではどのように読まれているのかについて述べる(Ⅱ)。次に、読みの二つの可能性を示し(Ⅲ)、現在の教育に求められていることについて考察する(Ⅳ)。最後に、『白いぼうし』の教科書教材としての可能性について分析する(Ⅴ)。

II 教科書教材としての『白いぼうし』

『白いぼうし』は1971年から現在に至るまでの50年間、小学校4年生の教科書教材として掲載され続けている。発行社も他のあまんきみこ作品に比べて多く、現在は学校図書、光村図書、教育出版の3社に掲載されている。最初の3年間のみ、光村図書では5年生に掲載されているが、次期からは4年生となり、以後4年生の教材として定着している。

『白いぼうし』は4つの場面から成り立っている。その簡単なあらすじを紹介しておく。

1、タクシー運転手の松井さんは、「おふくろ」から送られてきた夏みかんをタクシーに乗せている。お客の「しんし」とその匂いについて話し、「しんし」は降りていく。

2、松井さんは、道端に落ちていた白いぼうしを拾い上げ、中に入っていたちょうを逃がしてしまう。困った松井さんは、代わりに夏みかんをぼうしの中に入れる。

3、車に戻ると、小さな女の子がシートに座っていた。松井さんは、白いぼうしの持ち主である男の子が戻ってくるのを見ていたが、女の子に急かされて車を発進させる。

4、松井さんが男の子に気を取られている間に、女の子はタクシーから消え失せる。驚いた松井さんが窓の外を見ると、野原の上で沢山のちょうが舞っていて、どこからともなく、「『よかったね。』『よかったよ。』」¹という声が聞こえる。

女の子はぼうしから逃げ出したちょうであることが暗示され、現実と非現実のあわいのようなファンタジー作品となっている。作品の時間軸は、「六月のはじめ」(p.16)である。

『白いぼうし』の読みに関しては、様々な問題点が指摘されている。それは主に、物語の中心人物である松井さんの捉え方についてである。亀岡泰子は、「周知のように、小学校国語科教育の現場では、主人公のタクシー運転手松井さんの思いやりにみちた『やさしさ』が、作品の中心的モチーフとして最重要視されている。」²と述べる。

例えば、松井さんは、逃がしてしまったちょうの代わりに、母から送られてきた夏みかんを置いた。松井さんの優しさからくる行動とも解釈できるが、松井さんは車に戻り、「『おどろいたろうな。まほうのみかんと思うかな。なにしろ、ちょうが化けたんだからー。』」(p.22-23)と、男の子の様子を想像している。ここから、夏みかんをぼうしの中に入れたのは、松井さんの茶目っ気のある行動とも解釈できるはずである。

また、松井さんは最後に「『よかったね。』『よかったよ。』」(p.24)という、ちょうのものと思われる声を聞く。本文には、松井さんからちょうへの感情は明示されていないが、「松井さんは蝶の喜びに共感できるほどやさしい人だ」³という解釈までもがなされる。

¹ (2020)『国語四上かがやき』光村図書、p.24。以下作品からの引用は同書による。

² 亀岡泰子(1994)「あまんきみこ『白いぼうし』論—読者論の観点から—」『岐阜大学カリキュラム開発研究センター研究報告』第14巻3号所収、岐阜大学、p.45-50
[教材研究—あまんきみこ論— \(gifu-u.ac.jp\)](http://www.gifu-u.ac.jp)

2021年10月11日閲覧

³ 山本茂喜(1992)「『白いぼうし』試論—あいまいさの構造—」『日本語と日本文学』第16号所収、筑波大学国語国文学会、p.7

このように、作中におけるいくつかの松井さんの行動が、「松井さんの優しさ」の説明と解釈されている。しかし、先述した二つの場面は、様々な想像や解釈ができる。そのため、学校教育によって、「松井さんの優しさ」に集約された読みに決定されてしまうのは問題である。このことは度々指摘されているが、先にも述べた通り『白いぼうし』は、半世紀もの間、教科書教材として掲載され続け、同じ読みが行われてきた。さらに、これからも掲載され続けていくと考えられるが、その際、1つの読みに偏ることは問題であり、どのように読まれていくかが課題となる。

本論文では、『白いぼうし』が、これからの教育にどのように役立っていくのかについて考察していく。

Ⅲ 『白いぼうし』の二つの読みの可能性

(1) 夏みかんの役割

まず、『白いぼうし』の重要な場面で登場する、夏みかんに注目していく。

この物語は、「『これは、レモンのおいですか。』」(p.16)という、印象的なセリフから始まる。先述したあらすじの通り、レモンではなく、夏みかんのにおいであることが、運転手の松井さんによって明かされる。松井さんは、「いなかのおふくろが、速達で送ってくれ」(p.17)たのだと嬉しそうに語るのである。さらに、第2場面の最後に、語り手が夏みかんのことを語る一節がある。「運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。まるで、あたたかい日の光をそのままそめつけたような、見事な色でした。すっぱい、いいにおいが、風であたりに広がりました。」(p.19-20)語り手が、ここまで夏みかんの説明をする理由は何か。それは、決して、「大事な夏みかんを男の子のために手放す、優しい松井さん」の説明などではない。成田信子は、夏みかんが「身代わり」としての役割を果たすからだと述べている。第2場面で、白いぼうしが開けられるのと同時に、「松井さんの物語」とは別に、「ちょうの物語」が始まる。このあと、女の子がタクシーに乗り込むことも、松井さんにちょうの声が聞こえることも、夏みかんがきっかけで起きる。したがって、「松井さんの物語」と「ちょうの物語」は、「身代わり」の夏みかんによって交錯する。物語は、「車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいがのこっています。」(p.24)という一文で締めくくられる。夏みかんがちょうの命の「身代わり」として輝いていることを響かせているのだ。⁴

夏みかんは、二つの物語を交錯させるアイテムとして存在する。さらに、ちょうの命の象徴でもある。そのイメージが付与されているからこそ、輝くのである。このように、夏みかんには二つの役割がある。夏みかんに多くの説明を割くのもそのためである。この観点は、小学校4年生でも理解しやすいように考えられる。登場人物の優しさで片づけるのではなく、物語でどのような働きをするのか考えることによって、物語の深いところまで理解できる。そのことによって、別の読みも生まれるだろう。

(2) 曖昧な構造

(1)では、夏みかんの役割について論じた。ここでは、この物語の曖昧な構造について考察する。

先述した通り、物語の最後に、女の子はぼうしから逃げ出したちょうであることが暗示される。しかし、それを理解するのは読み手で、松井さんが理解しているかどうかは描かれていない。山本茂喜は、この曖昧な構造を理解せずに読むと、松井さんの優しさに傾斜した読みになってしまう、と述べている。松井さんは、第1場面・第2場面では現実の世界にいる。第3場面の女の子の登場で、非現実が姿をあらわす。第4場面では現実に戻るが、ちょうの声によって、再び非現実が出現する。つまり、第4場面で、それまで後ろに座っていたはずの女の子が突然消えてしまう。この不思議な事態によって、女の子がタクシーに乗り込み、松井さんを急かしてきたことは、非現実だったと分かる。その後、野原にちょうが舞い、ちょうの声を聞く。これを、非現実の出来事だと考える。そうすることによって、女の子と、白いぼうしから逃げたちょうと、野原のちょうが一つの筋として結びつくのだ。しかし、この物語は、松井さんが野原

⁴ 成田信子(2003)「松井さんには聞こえる—『白いぼうし』教材論—」『日本文学』「読む」第52巻第2号所収、日本文学協会、p.73-74

のちょうを「ぼんやり見ているうち」(p. 24)に終わる。それに対する松井さんの感想は述べられず、それまでの心理描写も突然消える。女の子の正体と、ちょうの声とが、読み手の中では決定的に結びつくが、松井さんの中で結びついたかどうかは明らかにされていない。あくまでも、読み手の心の中で響き合うのだ。⁵

この作品の曖昧な構造を理解すれば、女の子の正体が、読者の心の中で結びつくとう理解できるのである。学校教育の現場では、松井さんの心の中で結び付けて授業を終えてしまう。そのため、「松井さんはちょうの声が聞けるほど優しい人だ」という読みが生まれてしまうのではないか。松井さんの中で、女の子の正体が結びついたかについては、明らかにされていない。このことに注目した授業展開をすれば、新しい読みが出てくると考えられる。読者の心の中で結びつくという考え方は、客観的な読みである。そのため、極端に松井さんの優しさに傾斜することはなくなると考えられる。

これら二つのことから、『白いぼうし』は、読み方を変えることで、「松井さんは優しい」という一つの読みに偏ることなく、他の読みができる作品であると言える。ここでは、女の子の正体を読者の心の中で結びつける読みと、夏みかんが「身代わり」として二つの物語を交錯させる読みの、二つの読みの可能性について論じた。紹介した二つの読みは、授業の展開次第で、子供たちが十分理解できる読みだと考えられる。そのため、小学校4年生にとっても、多様な読みができる作品である。

IV 現在の教育に求められていること

(1) 新学習指導要領

2017年から2019年にかけて、学習指導要領が改訂された。それにより、多様性を尊重する教育が重視されるようになった。文部科学省のサイトでは、その趣旨や内容を解説している。

「主体的・対話的で深い学び」⁶を推進し、「『何を学ぶか』だけでなく『どのように学ぶか』も重視して授業を改善」⁷していくという。

例えば、「周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業に」⁸という項目では、「授業改善の視点」⁹や、「『対話的な学び』の視点」¹⁰として、「どうしたら、グループ間の議論を深め、様々な視点で考えを深めさせられるだろうか。」¹¹とある。つまり、個人個人で閉鎖的に学ぶのではなく、複数人で話し合いをすることで、新たな視点から物事を考えられるようにするということである。

周りの人々がどのように考えたか知ることは、視野が広がり、子供たち自身の考えを深めることにもつながる。2017年に改訂された小学校学習指導要領の、国語科、第3学年及び第4学年の内容の、読むことの欄には、次のようなことが書かれている。「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。」¹²つまり、国語の学習においても、文章を読んで考えたことを、周りの人々と共有することが重要視されている。一つの考えに執着するのではなく、それぞれが考えたことを尊重し、多様な考えを受け入れるような学びが求められているのである。

⁵ 3に同じ、p. 5-7

⁶ 文部科学省(2019)「平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介」
[平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介：文部科学省 \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp/20190817_001.htm)
2021年8月17日閲覧

⁷ 同前

⁸ 同前

⁹ 文部科学省(2019)「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」
[主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善 \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp/20190817_002.htm)
2021年8月17日

¹⁰ 同前

¹¹ 同前

¹² 文部科学省(2019)「小学校学習指導要領(平成29年告示)」
[小学校学習指導要領\(平成29年告示\) \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp/20190817_003.htm)
2021年8月17日閲覧

(2) 国語の授業での読み

今までの授業では、『白いぼうし』を、一つの読み方にこだわって読んでいた。一つの読み方とは、松井さんの優しさに傾斜した読みであることは先述した通りである。なぜそのような読みが行われてきたのだろうか。

田川文芸研は、教授課題の一つを、「作品世界を共体験させることで、小さな者や自然の小さな物にまで心を配る松井さんの“真のやさしさ”にふれさせ、人間の本質、真実をとらえる力を育てる。」¹³としている。つまり、松井さんの優しさに気付かせることで、小さなものにまで気を配るといふ、人間本来のあり方も捉えさせるということだろう。さらに、授業計画では、第3場面を除く全ての場面の「読みのねらい」に、「松井さんのやさしさをとらえさせる」¹⁴という文言が入っている。『白いぼうし』の主題を「松井さんの優しさ」とし、どの場面でもそれを確認させるのが目的であるようだ。この文芸研について、住田勝は次のように言及している。

『白いぼうし』の教材研究に大きな影響を持ってきた文献の一つが、田川文芸研(1985)である。(中略)この教材観は、この後に編まれていく、文芸研の教材研究本(久保、1997/西郷、2005など)に通底する「定石」として受け継がれていく。そしてそれは、ひとり文芸研のみにとどまらず、80年代90年代以降の『白いぼうし』の学習指導を「支配」していくのである。¹⁵

田川文芸研は、松井さんの優しさを主題とする読み方ができるという定石を作った。そのため、一つの文芸研究に留まらず、のちの『白いぼうし』の指導に多大な影響を与えてきたのである。言わば指導案の手本のような存在であり、その「松井さんの優しさ」を主題とする授業計画は、後の世代に受け継がれていったのである。

また、田川文芸研は、『白いぼうし』の教材化の観点として、「松井さんが、小さなものを見過ごさずに大切にする姿を、子供たちに見せてやりたい。そして、何が大切なのか見極め、小さなものを含めた、全てのものを生かしていけるような、そんな子供に育てたい。」¹⁶と解説している。

小さなものにも目を向け、それらを大切に扱ってほしい、という、子供たちに向けた思いが込められているのだろう。このことから、この文献は、子供たちに「松井さんのように、小さなものにも優しくしましょう」という教訓を読み取らせようとしていると考えられる。先述した通り、田川文芸研は、のちの学習指導に大きな影響を与えたものであることから、この教訓も多かれ少なかれ受け継がれていったのは確かである。『白いぼうし』は今まで、そのような教訓を読み取らせる授業が行われてきたのである。

橋本陽介は、授業で教訓を読み取らせる読みを、「道徳的読み」¹⁷とした。そのことについて、さらに詳しく言及しているのが石原千秋である。

主人公の「心情」を説明しなさいと言われれば、人間の心の動きは自由だから、それこそ読者の数だけ「正解」があつていいはずだ。しかし、学校空間ではなぜか「正解」が一つに決められてしまう。それは、道徳的に「正しい」心の動き以外は「まちがい」だとされるからである。¹⁸

¹³ 田川文芸教育研究会(1985)『文芸研・教材分析ハンドブック 7 あまみきこ＝白いぼうし』明治図書、p. 33

¹⁴ 同前p. 36 - 40

¹⁵ 住田勝(2010)「『白いぼうし』の授業実践史」松崎正治『文学の授業づくりハンドブック 第2巻』溪水社、p. 97

¹⁶ 13に同じp. 9 - 10

¹⁷ 橋本陽介(2019)『使える! 「国語」の考え方』ちくま新書、p. 20

¹⁸ 石原千秋(2005)『国語教科書の思想』ちくま新書、p. 27-28

つまり、これまでは、道徳的に正しい読みが正解とされ、その読みのみで授業を展開してきたのである。子供たちがどのように読んでも、道徳的読み以外のものは誤りとされ、一つに矯正された。

しかし、IV章(1)で述べたとおり、現在の教育に求められていることは、多様性や個性を尊重することである。今までは一つの解釈、つまり、道徳的読みのみで授業が展開されてきた。今後の国語教育に求められていることは、その道徳的読みを全員に押し付けるのではなく、それぞれが教材を解釈していくことである。

それを踏まえ、学校教育で必要なことは、「少なくとも二通りには読めるような小説教材を選ぶこと」¹⁹と、「二通りに読める技術を教えること」²⁰である。一つの読み方に偏ることのない作品で、異なった読みを提示するのである。今まで一つの読みしかないように授業を展開してきた。しかし、教員が異なった読みをいくつか示すことで、子供たちは、自由に様々な解釈ができるようになるだろう。

さらに、子供たちが異なった読みを一人で理解するだけではなく、それを互いに尊重し合う環境を作ることが重要である。それができて、多様性を認めることになるのである。そのため、「一人一人が根拠を挙げて、異なった読みを確認し合う」²¹ことが重要である。すると、自分とは違った解釈を発見したり、違う根拠から同じ読みができたりする。それにより、新たな着眼点に気付くことができるのである。

このように、国語の授業内で異なった読みを認め合うことは、多様な価値観を認め合うことにつながる。違った読みができる作品を用いて、それぞれが異なった読みを示す。さらに、それらを認め合うことで、多様な価値観を尊重し合う環境をつくることができる。そのような学びをすることで、現在の教育で求められている、「多様性や個性を尊重すること」が実現できるのである。

V これからの『白いぼうし』

先述した通り、教室での『白いぼうし』の読みは、松井さんの優しさに傾斜しているものが多い。それは、「みんなも松井さんのように、小さなものにも優しくしましょう」というような教訓を読み取らせるためである。その道徳的読みを行うために、松井さんの様々な行動が、優しさからくるものと解釈されてきた。

II章では、「松井さんの優しさ」と解釈されている場面を二つ紹介した。「母から送られてきた大切な夏みかんを、男の子のために差し出している」、「松井さんはちょうの喜びの声を聞き、共感している」というものである。しかし、III章で述べた通り、その二つの場面はどちらも、松井さんの優しさの説明ではなく、それ以外の役割があると考えられる。まず、夏みかんは「松井さんの物語」と「ちょうの物語」を交錯させるための「身代わり」として重要な役割を果たす。そのため、夏みかんの説明に文を割き、際立たせているのである。また、松井さんの中で、女の子の正体が結びついていのかどうかは、作中で明かされていない。ちょうの声をどのように受け取ったかについても、不明である。

III章で示した読み方で授業を展開していけば、少なくとも、「女の子の正体は、読者の心の中で結びつく」、「夏みかんは『身代わり』として、二つの物語を交錯させる」という、二通りの読み方ができる。さらに、そこから発展させて、他の様々な読みができる可能性もある。

これからは、松井さんの優しさに傾斜した読みだけでなく、多様な読みを行うべきである。なぜなら、現在の教育に求められていることは、多様性を認めることだからだ。国語では、その多様な読みを互いに認め合い、他者との感じ方の違いを学ぶことで、読みを深めていくことが必要だと言われている。『白いぼうし』は、多様な解釈ができる作品である。そのため、III章で紹介した読みなど、少なくとも二つの読みを用いて授業を展開していくべきである。また、それぞれが行った解釈を交流し合い、認め合うことで、多様性や個性を尊重した教育ができる。そのため、『白いぼうし』はこれからの教育に求められていることを果たせる作品なのである。

19 同前、p. 64

20 同前、p. 64

21 同前、p. 66

【参考文献および関連URL】

- ◆石原千秋(2005)『国語教科書の思想』ちくま新書
- ◆住田勝(2010)「『白いぼうし』の授業実践史」松崎正治『文学の授業づくりハンドブック 第2巻』溪水社、p.92 - 111
- ◆田川文芸教育研究会(1985)『文芸研・教材分析ハンドブック7 あまんきみこ＝白いぼうし』明治図書
- ◆橋本陽介(2019)『使える！「国語」の考え方』ちくま新書
- ◆亀岡泰子(1994)「あまんきみこ『白いぼうし』—読者論の観点から—」『岐阜大学カリキュラム開発研究センター研究報告』第14巻3号所収、岐阜大学、p.45 - 50 [教材研究—あまんきみこ論— \(gifu-u.ac.jp\)](http://www.gifu-u.ac.jp)
- ◆成田信子(2003)「松井さんには聞こえる—『白いぼうし』教材論—」『日本文学』「読む」第52巻第2号所収、日本文学協会、p.71-75
- ◆山本茂喜(1992)「『白いぼうし』試論—あいまいさの構造—」『日本語と日本文学』第16号所収、筑波大学国語国文学会、p.1 - 8
- ◆文部科学省(2019)「平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介」[平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介：文部科学省 \(mext.go.jp\)](http://www.mext.go.jp)
- ◆文部科学省(2019)「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」[主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善 \(mext.go.jp\)](http://www.mext.go.jp)
- ◆文部科学省(2019)「小学校学習指導要領(平成29年告示)」[小学校学習指導要領\(平成29年告示\) \(mext.go.jp\)](http://www.mext.go.jp)